

## 論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	総合医療・健康科学領域 精神・発達医療学教育研究分野 氏名 廣田 智也
指導教授氏名	中村 和彦
論文審査担当者	主 査 照井 君典 副 査 井原 一成 副 査 加藤 博之
(論文題目) Neurodevelopmental Traits and Longitudinal Transition Patterns in Internet Addiction: A 2-year Prospective Study (子どものインターネット依存状態の変化とその状態変化に関わる発達特性)	
(論文審査の要旨) インターネット依存 (IA) は近年広く認知されるようになり、精神・心理的な問題や生活の質、学業への影響が問題視されているが、IA を持つ子どものインターネットの使用行動がどのように時間軸で変化していくか、自閉スペクトラム症 (ASD) や注意欠如多動性症候群 (ADHD) などの神経発達症の特性が IA の縦断的变化にどのように影響するかについては、これまで報告されていない。これらの背景を踏まえて、本研究では 2 年間の観察期間で IA がどのように変化するかについて解析した。 弘前市の公立小中学校に在籍する生徒を対象として各年実施されている学校調査から、2016 年 9 月から 2018 年 9 月の間に集計されたデータを用いた。対象となった生徒は、研究開始時点で小学校 4 年生から中学校 1 年生であり、研究期間内に計 3 回調査に参加した。IA の測定は、研究開始時、1 年後、2 年後の計 3 回、ASD 特性、ADHD 特性の測定は研究開始時にのみ行った。子どもたちのインターネット使用の亜型の同定とその経時的変化については、潜在移行分析 (LTA) を用いた。これらクラスの経時的移行パターンに対する神経発達症の特性の影響については、クラスの移行パターンを従属変数、ASD 特性、ADHD 特性、性別、年齢を独立変数として多項ロジスティック回帰により解析した。 各時点におけるインターネット使用の亜型は 3 つ同定された (病的なインターネット使用群、過度なインターネット使用群、適度なインターネット使用群)。調査開始時点で IA の状態の子どものうち、その後 2 年間インターネット依存の状態が維持される確率は 47%、調査開始時点で IA でなかった子どものうち、その後の 2 年間に IA の状態に移行する確率は 11%であった。また、ASD 特性と ADHD の不注意特性が IA 状態の維持と新たな発生に関連していることが明らかになった。これらの結果は、IA を持つ子どもの発達特性を評価することの重要性を示すとともに、発達特性に関連した問題へのアプローチが子どもの IA の改善や予防につながる可能性を示唆しており、学位授与に値する。	
公表雑誌等名	J Autism Dev Disord. 2021 Apr;51(4):1365-1374.